

人間成長過程における教育環境阻害要因の探索
教育環境アセスメントに関する研究 第2報告

金平文二*・岩井絹江**

(昭和59年10月15日受理)

A Pilot Study for Factors to Disturb the Educasional
Environment in Human Development

—A Study for Assesment of the Educational Environment (II) —

Bunji KANEHIRA and Kinue IWAI

(Received October 15, 1984)

はじめに

青少年の健全な育成をはかるうえで、個人的条件のほかに、その環境が重要な要因となることはいうまでもない。最近における文化的・社会的・経済的環境の急激な変化に伴って、青少年の意識・態度・行動などにも種々の変化がみられ、それらは多様化し、複雑化することによって、青少年の理解のしかたや育成のあり方をいっそうむずかしいものとしている。教育環境アセスメントに関する研究第1報告において、女子学生の意識についての調査を行い、その結果についてまとめたが、大学生活の中での充実感、日常生活での満足感、自己実現の度合などの実態についての把握をとおして、今後検討すべき課題がいくつかあることを指摘した。

しかしながら、現在の青少年をめぐる環境要因にはさまざまなものがある。教育環境アセスメントによって、青少年の健全な発達・育成をはかるうえで、環境がどのように影響を及ぼしているかを評価し、教育環境をどのように整備するかを考えるにあたっては、まず、教育環境を阻害すると思われる要因にはどのようなものがあるかを明らかにする必要がある。そこで、今回の第2報告では、この点を分析することに焦点をおいて、研究に着手することとした。

しかし、教育環境を阻害する要因を探究するといっても、それは容易なことではない。そこで、分析の方法としては現象記述的なものではあるが、新聞記事の中で教育環境を阻害すると思われる記事をすべて切り抜きチェックすることから始めた。日常的なさまざまな現象を示

す新聞記事を分析すれば、教育環境を阻害する要因としてどのようなものがあるかを広範囲にわたって収集することができ、教育環境に関して現在われわれが直面している問題にどのようなものがあるか、今何が問われているかなど、現在の生活の中から問題の兆候を明らかにすることができるのではないかと考えたわけである。このような発想が今回の第2報告による調査・分析の出発点である。

I 研究の目的

現代の青少年の健全な育成をはかるうえで、それを阻害すると思われる要因にはどのようなものがあるかを探索するために、新聞記事のうち教育環境を阻害すると思われるさまざまな事件、出来事、解説などをできるだけ多く収集し、それらをKJ法的手法によって分類することをとおして、教育環境を阻害する要因についての実態を把握することを意図した。何が教育環境を阻害する要因かについて、現在の段階ではまだまだ確定していないわけであるが、新聞記事にはわれわれの日常的な生活のなかで抱えている問題にどのようなものがあるかを示す材料が多数記載されている。それを分類・分析することによって、教育環境を阻害すると思われる要因にはどのようなものがあるか、それをできるだけ広範囲にわたって探索しようとしたのが、今回の研究のねらいである。

II 研究の方法

朝日新聞縮刷版の昭和57年12月より昭和58年5月までの6カ月分の朝夕刊の記事について、教育環境を阻害すると思われる内容について、直接的、間接的に影響するものを問わず、また、記事の大小の別なく一項目として

* 児童学科

** 学生部

チェックする。さらに、他の研究者がチェックもれがないかについて点検するという方法をとった。記事のチェックにあたっては、教育と直接のかかわりのない政治・経済に関する記事、外交問題、外国事情に関する記事は除くことにしたが、要因をできるだけ多面的に抽出するために広範囲にわたってチェックするようにした。

チェックした記事は切り抜き、それらをKJ法的な手法を用いて、内容的に類似しているものに分類し、それぞれに内容をあらわすと思われる表題を付けて分類項目とした。この分類作業の結果、記事の総数は1485件、分類項目は32項目となった。

今回の研究は、人間の成長過程における教育環境を阻害すると思われる要因についてどのようなものがあるかについての探索的な試みであり、従って限られた記事データから、はっきりした成果は得られないかもしれないが、中間報告という形でデータをまとめてみることにした。

Ⅲ 結果の考察

1. 教育環境阻害要因考察のための枠組

教育環境の阻害要因についての分類項目は、総数32項目となったが、これらの項目について、教育アセスメントという観点から結果の考察を行うにあたって、教育環境を阻害する要因として、直接的、間接的に影響するものなど、さまざまなものがあげられた。それらの要因について、表1「教育環境阻害要因の構成枠組」に示すような枠組を仮説として設定した。

表の中心に、家族関係内における子供から大人までの人間成長過程の各段階に直接的に影響する分類項目を軸として配置し、この人間中心の軸の周囲に、人間生活に直接的に関係する生活的・社会的環境などの項目を、さらにその周囲に、物理的・自然的環境などの間接的に関係する項目を配置した。

2. 分類項目別考察

各分類項目のうち、人間成長過程についてその内容を考察すると次のとおりである。

(1) 家 族

人間誕生の根源は夫婦（家族）である。ここに生まれ、育つ人間への教育環境を考えるということで、家族の項目を最初に置いた。記事数をみると、女性の意識変化に関する記事が59件と圧倒的に多い。「子育て、家庭を守

表2 一 家 族

| 小 分 類 項 目 | 記事数 |
|---------------------|-----|
| 1 結婚 | 7 |
| 2 家庭の状況 | 5 |
| 3 子育てに関する父親の現状 | 4 |
| 4 子育て(しつけ)に対する父親の意見 | 5 |
| 5 家庭内暴力と立ちなおりの実例 | 6 |
| 6 女(主婦、母、妻)の生き方の変化 | 5 |
| 7 離婚と子ども | 10 |
| 8 離婚の現状 | 2 |
| 9 離婚に対する女性の意見・意識 | 5 |
| 10 主婦(母親)の家庭外活動への進出 | 10 |
| 11 主婦(母親)の意識調査 | 7 |
| 12 主婦とパート(家計) | 5 |
| 13 親族殺人 | 8 |
| 14 その他 | 7 |
| | 86 |

る女」から「仕事を持ち社会活動をする1人の人間として行動したい」という女の主張が現われている。働いている女性、働きたいという意識を持っている女性も含め7割近くの人が、仕事に関心をもっている。その反面、女性の就労条件、環境の不十分さ、子ども(カギッ子)の問題が指摘されている。

さらに、女性の意識変化にともない、男性の理解不足による性格の不一致等の中年・子のいる夫婦の離婚が目立ち、自分の意志に関係なく直接かかわってくる子どものことが重要な問題となってくる。近年、校内暴力・いじめ等非行の低年齢化がいわれるが、夫婦・家族関係のゆがみが、非行にはしる子どもの心理的ゆがみに直接影響していると指摘されている。

子どもの基本的生活習慣は乳幼児の頃に家庭で親や家族によって身につけられ、そこに学校教育を受けていく。人間成長上の大切な核である家庭・家族に発生する様々な問題は教育環境を阻害する大きな要因である。

(2) 乳 幼 児

この項目の記事数は、家族から老人までの7項目中、一番少い。その中で、比較的多かったのは母親の育児知識不足・欠如が原因で発生する問題や、それらに対する医者や育児相談者の指導的意見である。

今の母親は書物から得た知識は多少あるが、核家族化で実際に体験した人の意見を聞く機会がなく又、兄弟が

表1

教育環境阻害要因の構成枠組

| | | | | | | |
|--|--|--|---|--|--|---|
| 憲法・裁判9 | ・憲法に係わる問題7・裁判、死刑制度2 | | | | | |
| 軍備・核83 | ・国内の核、軍拡の状況12・国内の反核状況11・国外の核、軍拡の状況11・国外の反核状況10・原子力空母寄港問題8・原水爆問題5・原子力発電所問題9 ・軍縮、反核への意見8・平和への願い9 | | | | | |
| 社会的不正事件28 | ・脱税2・汚職6・覚せい剤7・性風俗8 | | | | | |
| 消費者問題19 | ・商品トラブルの実態12・消費者保護運動7 | 社会世相3 | | | | |
| 経済問題37 | ・労働力、賃金問題7・経済成長予測7・経済変化への対応9・税金問題8・株の動き1・貿易1・石油事情2・銀行の週休2日制度に係わる問題1 | | | | | |
| サラ金・クレジット33 | ・サラ金にともなう事件15・サラ金業界の実態3・サラ金被害対策4・クレジット問題3・クレジットカードにともなう問題5・住宅ローン3 | | | | | |
| 隣人関係6 | 日本人の生き方4 | 雇用問題28・学生の就職状況11・失業6・技術革新と雇用11 | | | | |
| 差別問題27 | ・家庭内での男女平等問題3・人種、部落、病気等の差別問題9・女性の社会進出6・労働上の男女差別6・男女差別に対する意見3 | | | | | |
| 情報化社会49 | ・情報化社会の与える影響1・テレビの教育的影響8・情報化の進展状況10・情報の公開8・コンピュータ利用(OA化)11・電算機の著作権問題5・ロボット4・未来技術2 | | | | | |
| 教育問題90 | ・教育改革16・教科書無償配布制度5・私学助成問題6・教科書検定についての政策4・教科書問題の実情19・教育に係わる汚職4 ・帰国子女対策2・入試改革6・共通一次に係わる問題、意見16・特色ある入試3・入試にともなう不正6・留学生2・放送大学1 教師32 ・教員免許の問題3・教師の現状6・日教組関係3・教師の非行、体罰11・教師への要望3・教師のあり方について識者の意見6 | | | | | |
| 家族86 | 乳幼児39 | 小学生73 | 中学生124 | 高校生32 | 大学生・若者46 | 老人47 |
| ・結婚7・家庭状況5 ・子育て等について7 ・父親の現状、意見11 ・家庭内暴力6 ・女の生き方の変化10 ・離婚17 ・主婦の活動、意識12 ・家計とパート8 ・親族殺人7 他5 | ・特色ある乳幼児教育4 ・おもちゃ3 ・育児上の悩み、対策6 ・育児上の注意9 ・育児に関する意見4 ・育児上の過失9 ・育児に悩む親の問題10 子殺し2 他1 | ・入学にかかる経費2 ・特色ある小学教育8 ・登校拒否6 ・教師による体罰2 ・子どもの非行8 ・子育てへの意見14 ・子どもへの性教育1 ・地域外通学、塾2 ・子どもの自殺7 ・中学受験3 他20 | ・特色ある中学教育4 ・中学生の非行18 ・校内暴力実態29 ・校内暴力、非行に18 に対する対策(学校、 公的機関、親) ・校内暴力への意見23 ・戸塚ヨット10 ・高校受験8 他14 | ・特色ある高校教育7 ・中途退学2 ・高校生の非行7 ・高校生とバイク3 ・高校生の精神状態2 ・〃に対する意見5 ・高校生の体格1 ・高校生の就職1 他14 | ・特色ある大学教育5 ・大学進学の実態4 ・大学離れ2 ・現代大学生気質12 ・若者の精神状態4 ・下宿生の経済状況3 ・大学生の就職2 ・専修学校2 ・政治への関心2 他10 | ・高齢社会3 ・老後の生活5 ・老人の自立3 ・老人の就業3 ・老化防止2 ・老人福祉4 ・老人の病気、ボケ6 ・老人医療7・介護9 ・老人ホーム、住宅5 |
| 福祉85 | ・福祉政策の現状8・障害者の現状2・障害者への理解12・障害者への無理解7・障害児教育5・障害者に対する物的援助、生活環境づくり9・障害者に対する精神的援助9 ・障害者の活躍、社会進出12・障害を乗り越える努力6・障害者の自殺2・難民問題3・年金問題10 | | | | | |
| 医療問題185 | ・医学の進歩18・治療ミス問題11・医療機関の不正9・がんの実態と治療11・急性疾患の実態6・脳死と臓器移植4・人工心臓5・現代病の実態と対応8・歯の病気と治療10・安楽死1 ・出産7・献血の実態と提案3・病気の子供と日常生活4・喫煙、飲酒の害と対応7・心の病気と対応10・自殺6・薬品公害と対応18・ビタミン問題8・医療政策の実態と意見12 | | | | | |
| 農水産問題20 | ・農業政策8・農産物8・海産物4 | 食品問題16 | ・自然食品8・食品添加物問題4・添加物に関する政策と消費者の動き4 | | | |
| 遺伝子問題11 | ・遺伝子組み換え問題2・遺伝子組み換えに対する意見4・遺伝子の治療への応用5 | | | | | |
| 優生保護26 | ・優生保護法改正反対の動き5・妊娠中絶の現状4・妊娠中絶に対する意見3・体外受精の実態4・体外受精に関する倫理委員会4・体外受精に対する意見6 | | | | | |
| 宅地・住宅問題38 | ・住環境のトラブル12・土地利用問題6・住環境の改善案10・住環境に関する法律問題10 | | | | | 環境アセスメント32 |
| 輸送機関に関する問題46 | ・交通機関の現状と問題12・輸送安全対策8・輸送効果2・交通機関の事故7・自動車公害の現状と対策12・自転車公害(放置自転車)現状と対策5 | | | | | ・環境アセス法案の現状5 ・環境改善対策8 ・環境を守る町づくり11 ・省エネの実例と意見4 ・新産業問題4 |
| 人工による環境破壊40 | ・人工による環境破壊5・環境汚染物質6・水質汚染の現状、対策12・大気汚染の現状6・大気汚染対策4・火災発生の現状4・防火基準と違反3 | | | | | |
| 動物保護18 | ・鳥獣の実態5・鳥獣保護の現状9・ペットによる害と動物愛護4 | | | | | |
| 自然保護29 | ・地震による害4・地震対策13・風水雪災害12 | 自然保護71 | ・自然保護政策8・緑を守る基金10・自然保護の動き43・緑化問題10 | | | |

(数字は度数)

表3—乳幼児

| 小分類項目 | 記事数 |
|--------------------|-----|
| 1 特色ある幼児教育 | 4 |
| 2 おもちゃと子ども | 3 |
| 3 育児上の親の悩みと対策 | 6 |
| 4 身体に関する育児上の諸注意 | 9 |
| 5 育児について医者から母親への意見 | 4 |
| 6 育児上の大人の過失 | 10 |
| 7 子殺し、心中(育児 悩み) | 2 |
| 8 子どもの人口減少 | 1 |
| | 39 |

少ないため子守りなどの経験がない等、実践的育児知識が欠如している。さらに、このことが急救時の不十分な対応や育児ノイローゼ、さらには子殺しまでもひき起こす原因になっていると指摘している。また、一方で、人間成長の基礎となる乳幼児期の重要性と、乳幼児をとりまく育児・家庭環境、特色ある幼児教育が取り上げられている。

(3) 小学生

表4—小学生

| 小分類項目 | 記事数 |
|-------------------|-----|
| 1 新1年生について | 2 |
| 2 特色ある小学校教育 | 8 |
| 3 登校拒否と対策 | 6 |
| 4 小中学校、規模調査 | 3 |
| 5 教師による体罰 | 2 |
| 6 子どもの非行実態と対策 | 8 |
| 7 子どもの食生活(給食含む) | 4 |
| 8 子育てに関する識者の意見 | 4 |
| 9 子どもへの性教育 | 1 |
| 10 域外通学・塾 | 2 |
| 11 現代っ子の金銭感覚 | 2 |
| 12 子どもの事故死、自殺 | 7 |
| 13 子どもと戦争 | 1 |
| 14 公立学校の学費 | 2 |
| 15 学校開放 | 1 |
| 16 中学受験 | 3 |
| 17 芸術文化が子どもに与える影響 | 7 |
| | 73 |

小学生になると乳幼児期にくらべ、件数と共に内容が幅広くなる。小学生期は、幼稚園等の小集団から学校という大集団に移り、初めて基本的学習にふれ、環境・人間関係ともに大きく変化する重要な時期である。学習活動・環境の重要な時期であるからこそ、特色ある学校教育(8件)、子育て論(14件)、芸術文化と子どもへの影響(7件)など大人が真剣に考えている様子が見える。

小学校の3・4年あたりから学習上の「落ちこぼれ」が出はじめ、非行・登校拒否へとつながる実態が取り上げられている。従来の一斉授業方式とも関係するといわれるこの実態に対し、子どもたちが自主的に学び時間を増やし、わからせるための個別学習を折り込んだオープンスクール等教育者側の工夫・試みが報告されている。しかし、これらの試みを拡大させ本格的に実践するには、余裕ある校舎やオープンスクールに適した教室構造、個別学習を進めるに適したクラスの児童数、教師の質と人数、教科書以外の学習資料が必要となる。

しかし、学校側の教育内容・教育環境の充実がはかられても、家庭における基本的な生活環境(親の教育に対する考えや態度、しつけ、親自身の言動)が整えられなければ、やる気のある心豊かな子は育たないと指摘している。

さらに、今の子どもの置かれている環境は親の育った時代にくらべ、大きく変化している。車の激増・住宅事情・人工による自然環境の破壊などで、子どもがおもいきり全身をつかって遊べる場所はない。このような状況の中で、子どもは工事現場のスキ間、防火用水等たくみに遊び場を見つけ、遊びを工夫しているが、これらがいたましい死亡事故につながっている例も報告されている。

このような状況に加え、テレビ・マンガ・ゲーム・高価なおもちゃなど大人中心の物の氾濫が子どもの遊び傾向に大きく影響を与えている。これら物の氾濫は子どもの金銭感覚にまで影響を及ぼし、万引きなどの非行を生み出す要因にもなっていると指摘している。

「今の子どもは平均2つの塾通いをしている」との報告があるが、今の子どもは塾通いの区切られた空時間内で、同学年同クラスの時間の合う子と約束をして、決った場所で遊ぶことが多い。これら少人数での遊びは、他学年の入り混った多人数での遊びにくらべて、上下のつながり、リーダー的素養や他への思いやりなど社会性の発達ができにくく、子どもの心の発達・成長上望ましく

ない傾向であると多くの人が指摘している。

近年、子どもの体格は向上している。しかし、形態的大きさに対して、骨折、貧血などひ弱な子どもの実態が問題となっている。遊べない、遊ぶ場所がないことも原因の一つであろうが、インスタント・冷凍食品を使った簡単な食事内容や塩分・糖分過剰の snacks 菓子のおやつなど、今の家庭における食生活のあり方にも原因があるといわれている。家庭での食生活とともに、学校給食のあり方、食品・添加物の安全性なども含めて、子どもの食生活を考え直す必要性を医者や栄養士が指摘している。

心身共に著しく成長をする小学生期、今後の社会を荷なう大事な子どもたちを取りまく環境は、深く考えるほど問題が多い。

(4) 中学生

表5—中学生

| 小分類項目 | 記事数 |
|---------------------------|-----|
| 1 特色ある中学の教育内容 | 4 |
| 2 現代中学生の特徴 | 1 |
| 3 男子生徒の非行 | 11 |
| 4 女子生徒の非行 | 7 |
| 5 生徒の自殺 | 4 |
| 6 校内暴力・非行の実態調査 | 13 |
| 7 对学校、教師への暴行行為 | 16 |
| 8 校内暴力に対する教師の自己防衛 | 2 |
| 9 校内暴力に対する公的機関の対策 | 14 |
| 10 校内暴力に対する保護者の対策 | 4 |
| 11 大人による生徒への非行誘因 | 5 |
| 12 校内暴力・非行に対する公的機関への識者の意見 | 11 |
| 13 校内暴力・非行に対する親への識者の意見 | 12 |
| 14 高校入試 | 8 |
| 15 高校受験のための内申書記載事項について | 2 |
| 16 戸塚ヨットスクール | 10 |
| | 124 |

記事数は医療問題に続いて第2位(124件)で幼・小・高・大にくらべてはるかに多い。さらに内容としては非行・暴力の実態や対策などの記事がほとんどで、85%(105件)を占めている。(S57～S58のデータによる)中学生非行の増大が大きな社会問題となっているが、これらに対し文部省・総理府、校長会などが実態把握のため種々の調査を実施し、その結果について考察をしている。調査によると7校に1校が何らかの形で対教師暴力

・生徒間暴力・施設設備破損などの校内暴力があることを報告している。男子は服装・態度を注意した教師への集団暴行や生徒間ランチ等が多くみられ、女子には対教師への暴力は少ないが、生徒間の陰湿な集団ランチが目立つ。

校内暴力とともに、男子ではとばく、婦女暴行、殺人、窃盗が見られ、女子では大人からの働きかけによる覚せい剤、売春や盗みが出てくる。さらにこの年令になると、家庭内暴力も大きくクローズアップされてくる。

このような現状について教員組合が教員に対して実施した「非行・問題行動に関する実態調査報告」の中で「非行の原因は家庭環境の悪化による」と報告している。

さらに、総理府が小5～中3までの子どもに対して実施した「子どもの意識に関する世論調査報告」の中で、子どもは非行の原因をしからぬ甘い親、処置の甘い学校にあると考えているとの報告をしている。

文部省・総理府では、非行化防止に関する推進会議や非行対策巡回相談を行い、教育委員会・教師・保護者に働きかけている。また、公的機関の対応を待ち切れずに親自身がPTAなどで組織をつくり、学校内外で直接に生徒指導をはじめた例も出てきている。このように、子どもを非行へ導く要因や教育環境を阻害する要因を取り除くために各方面で真剣に取り組む姿がはっきりみられる。

また、これら公的機関・親の対応・対策について識者もいろいろな角度から意見をのべており、見出しをひろってみると次のようである。

- 荒れる中学、克服できる —— 生徒指導に欠かせない教職員の連携
- 校内暴力の根を断て —— 学校は偏差値製造工場から脱せよ
- 生徒に休、退学の権利を —— 学習意欲もどれば復学させて
- 義務教育に非定型コースを —— 落ちこぼれ生徒の教育は社会で
- 温存された悪い伝統 —— 小規模化で生徒大事に (学校教育に根をはる弱者いじめの論理)
- 大げさな報道禁物 —— 中学生暴力誘発の契機にも
- 病む社会の再建必要 —— 大人が愛情を持って、防止の努力各界で
- 不安でも離れて見守れ —— 大人世界へ準備する時
- 毎夜、友達のように会話を —— 親がシンナー恐れてはだめ
- 中学へ行きたくない本音は「暴力ふるわれる」がトップ —— 大半の親、気がつかず

学習活動の面では、落ちこぼれ対策、偏差値、内申書、五段階評価を含む進学問題、これらにともなう進路指導など様々な問題が出てくる。

さらに、進学に悩んだり親にしかられての自殺や、友

人に同情しての女子中学生の心中,原因不明の自殺など,思春期のデリケートな感情をもつ中学生への真剣な対応がここでもせまられている。

このような様々な問題を持つ中学生の姿を校長会が出した報告書では「身につかぬ生活習慣,遊ぶ時もひとりぼっち,社会性に乏しい中学生」と表現している。現場の教師は一般の中学生に対し「手は焼かせぬが…面白味のない生徒たち」とも言っている。また東京都の青少年問題協議会では,現状に対して,「青少年をめぐる諸問題の中心には,勝手気ままを通そうとする自己中心主義(ミーイズム)がある。社会のメンバーとしての役割を考える訓練の場が,家庭からも,学校や地域などからも失われてしまったことが,青少年の自立(自律)を遅らせ,ミーイズムの進行に拍車をかけていると指摘し,青少年が自立に向うような生活環境(家庭・学校・職場・地域社会を含む)」の実現などを,青少年行政の中心課題としている。

(5) 高校生

表6—高校生

| 小分類項目 | 記事数 |
|----------------|-----|
| 1 高校の教育内容 | 7 |
| 2 中途退学 | 2 |
| 3 非行問題 | 7 |
| 4 教師の態度(禁煙) | 1 |
| 5 高校生と自動2輪 | 3 |
| 6 高校生の精神状態 | 3 |
| 7 高校生に対する読者の意見 | 5 |
| 8 高校生の体格 | 1 |
| 9 高校生の就職 | 1 |
| 10 進学援助(民間奨学金) | 2 |
| | 32 |

司期間の中学生にくらべて,記事数では $\frac{1}{4}$ に激減している。内容では校内暴力関連記事は0件,非行問題6件と大きく変っている。これは高校生になり現状に対する不満が解消したのではなく,義務教育を終えて自分の適性・学力に合わせて進学しているために校内暴力・非行という形で現われにくくなったのであろう。

しかし,適性・学力に合う高校に進学といっても,現実には偏差値で振り分けられる高校入試の状況の中で,合っている高校に進学しているかどうかは疑問を残すところである。このことは高校中途退学という言葉が示すよ

うに,校内暴力・非行という表立つ形になる前に,退学という形をとるため中学生のように記事になることは少ないようである。現実には「輪切り進学指導・むりやり入学」が中途退学者を増加させ,年に10数万人もの中退者を出していることは考える必要があるだろう。さらに非行に関する記事数は少ないが殺人・シンナー・暴力団など凶悪なものが増加している。

この頃の年齢になると「思春期挫折症」「思春期拒食症」など精神的に悩む高校生が増加し,悩みを自分で解決できない者や無気力・無関心な若者が増加する一方である。人間として生きる力を身につけないまま,大きくなっていく事実がここに現われているようである。教育環境を考えていくなかで,若者がそれぞれに自立できる人間に育てるにはどうしたらよいかを,さらに考えていく必要がある。

「全員入学」時代の高校生の学力低下が問題として取りあげられているが,高校側でも低学力者を見放さないための教育方法の工夫がされている。大学入試にともなう共通一次や高校生の就職など,かかえている問題は大きい。高校制度の改革が検討されているようだが,様々な問題を引きおこす要因にもなるので,今後各方面での慎重かつ十分な検討が必要であろう。

(6) 大学生

表7—大学生

| 小分類項目 | 記事数 |
|----------------|-----|
| 1 大学の役割 | 1 |
| 2 特色ある大学教育 | 5 |
| 3 大学進学の実態 | 4 |
| 4 大学離れ | 2 |
| 5 図書館について | 5 |
| 6 私立大学納付金 | 1 |
| 7 現代学生気質 | 2 |
| 8 学生の精神状態 | 4 |
| 9 下宿生の生活状況 | 3 |
| 10 卒業式 | 2 |
| 11 学生の就職に対する意見 | 2 |
| 12 専修学校 | 2 |
| 13 大人の若者に対する理解 | 1 |
| 14 若者の政治に対する関心 | 2 |
| | 46 |

近年、大学への進学率がやや減少傾向にあるといわれながらも、一方では有名大学への受験地獄は激しさを増している。しかし、医師過剰、開業難との関連からか歯系私大で4年間で38%の減少や職業に直結する専修学校への入学が増加の傾向にある。

全国学生新聞連合会が全国の大学生1万人に実施した調査の中で、生きがいはスポーツ・趣味(57.5%)、アルバイトは遊ぶお金を得るため(49.7%)、政治には関心なし(38.4%)と「遊び好き・現実主義」の現代学生の特徴を報告している。また、最近では大学の購売部にマンガ本コーナーができるなど学生の読書傾向の変化と文芸書離れを表わしている。

大学生をかかえる親の収入は支出に比してあまり上昇しないため、親の負担は年々重くなっている。地方の高校生が受験から大学納付金、下宿料まで支払って東京の大学生になるまで160万円必要といわれている。

大学生の就職については、データを収集した時期が就職シーズンを終えているせいか2件のみで、その中で識者は「進路選択のカギを握る専門科目の決定を慎重に」とのべている。

学生の精神状態を取り上げた記事によると今の学生に時々みられる「成熟拒否、アパシー(無気力症)」などの病理現象の原因は、共通一次、値差値による「輪切り」受験にあると述べている。これらの現象を「輪切り症候群」と呼び、その様子を心理学者は次のように説明している。

「共通一次が始まり、点数だけで進学を決める(不本意入学)傾向が強まり、入学後自分の専攻が自分の性格に合わないことを知って学習意欲を失い、さらに怠学・転学・退学する学生が増加している。不本意入学のため重要な青年期に不本意な生活をしてスチューデントアパシーに陥り、自殺までするものもある」。この輪切り症候群とともに、学生の症状の中で問題視されているのは、親が就職時の面接にまで顔を出すなどの母子癒着の「過保護症候群」といわれているものである。

自主的・個性的・創造的人間の形成を大学教育に期待しながらそのテーマと現実にはあまりにも大きな隔りがあるようである。教育のあり方、家庭のあり方など思い切った発想の転換と勇氣ある対応がない限り、大学生の病理現象はなおらないようである。しかし、これらの病理現象をはっきり持たない一般的にやる気がないといわれる学生をも含めて、「小数グループでの授業で、直

接、教員と語り自分から話すことの楽しさを教える」などちょっとしたきっかけを教員側が与えることにより、知的興奮を生み学生を意欲的にさせることが多いといわれている。このようにとまどっている学生が考えることの意義や学生生活の楽しさを知り始めれば自ら動き出すのではないだろうか。

(7) 老人

高齢化の進行にともなって、昭和57年10月現在で、65才以上の老年人口は、1,135万人で総人口の9.6%を占め、今後その比率は増大する傾向にある。高齢者にとっ

表8—老人問題

| 小分類項目 | 記事数 |
|---------------|-----|
| 1 高齢化社会 | 3 |
| 2 老後の生活 | 5 |
| 3 老人の自立 | 3 |
| 4 老人の就業 | 3 |
| 5 老化防止 | 2 |
| 6 老人福祉 | 4 |
| 7 老人の心の病気、ボケ | 6 |
| 8 老人介護 | 9 |
| 9 老人医療 | 7 |
| 10 老人ホーム、住居問題 | 5 |
| | 47 |

ては、体力の低下、疾病その他によって、看護を要する状況が多くなるとしても、人間として老後に備えた設計をどうするか、周囲に甘えず自立をはかり、生きがいある老後を送ることはきわめて大切である。その意味で、小中高大教育の延長線上に生涯教育を考えるべきであろう。その前提として老人問題についてみておくことにした。

中高年層においては、公的高齢年金への関心が高く、老後の生活は公的年金ですごしたいと考える人が多い。民間による財形年金も出ているが、老年人口増大に対応できるような年金の充実が必要となる。

また一方では、健康なうちは働きたいという高齢者の就労意識は高く、68%の人が就労を希望している。しかし、希望に対して高齢者雇用の実情は低く、「高齢者事業団」が紹介をしているが見通しは暗く、自立願望と現実との落差は激しい。老人のための就労対策が行政施策が今以上に必要となってくるであろう。

現在老人ホーム等に入所中のいわゆる要保護老人は5

%前後とみられるが、今後増大の傾向にある、この一方で、寝たきりの在宅老人も増大傾向にある。これら保護・看護を要する老人の介護が大きな問題となっている。さらに、寝たきり老人とはちがうが、体は健康だが、夜中はいかい、奇声、無意識の不潔行為（排尿・便）などの症状をもつボケ（痴呆）老人を持つ家庭の負担は大きく、今後、公的機関での対策が必要となっている。

人口の高齢化にともない、今後、保護を要する老人には適切な保護を、自立可能な老人には住宅・年金・医療・レクリエーション等の公的援助はもちろん、ボランティア・ホームヘルパー・老人保養センター等民間資源をもっと活用していく必要があるであろう。

以上が、人間成長過程を主軸とする各分類項目ごとの、教育環境の阻害要因についての概略的な考察である。

おわりに

この研究は、教育環境を阻害すると思われる要因にはどのようなものがあるかを探索しようとしたものであるが、人間の成長過程を主軸とした各段階において、人間の教育環境を阻害するさまざまな要因が広範囲にわたって存在することが、現象的な事実によって把握することができるように思われる。ここで考察した要因はまだ仮説的なものであるが、今後はこれらの各要因について、調査・研究を行うことによって教育環境を阻害する要因はなにかについて検証するとともに、教育環境の改善のための方法についてどのようにすべきか、さらに研究を継続する予定である。

参考文献

- 金平文二・岩井絹江「女子学生の意識についての調査—教育環境アセスメントに関する研究—第1報告」
東京家政大学研究紀要、第24集(1)、(1984)